

1. 国際理解と異文化教育及び研究

異文化理解教育について、日本ユネスコ委員会は次のように述べている。「国際理解とは文化の相互理解 Intercultural Understanding（異なった文化と文化の間の相互理解）だと言える。そして、他国・他民族・他文化の理解では、世界文化の多様性を受容する相互尊重と、寛容な態度および共感的な理解ということが重要となるであろう。」

この異文化理解における科学的研究の発端は比較的新しい。アメリカの文化人類学者が原住民の研究から現代人の研究に入った時期と重なり、Hallが1959年に著した The Silent Language であると言われる。この研究は、海外に出て行くアメリカ人や逆に海外から入ってくる人々がその地でうまく適応してゆくためと、アメリカが抱える人種や民族の様々な問題を理解し適切に対処するためであった。このことは現在の日本に当てはめると、人種や民族問題を人権問題に置き換えて考えて見る事が出来る。

2. 学習指導要領と英語教育の目標

新学習指導要領の外国語（英語）の目標は次のようになっている。

「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。（中学校）」

これは中学校の例であるが、高等学校も本質的にこれと同じである。ここで「コミュニケーション」と「国際理解」がキーワードになっている。したがって、この2つが目標と言ってもよいだろう。こうした学習指導要領を受けて、学習者のコミュニケーション能力の習得と、異文化理解を促進するために、ALTとのティーム・ティーチングが中学や高校において以前よりも活発に展開されている。この教授法によって、母語話者の英語をインプットし、相互のコミュニケーションの訓練が可能になる。

3. 相互コミュニケーションと英語教育の展望

現在の英語教育は受信・発信両能力の養成を目指しているが、これからの英語教育においては、カルチャー・ショックやコミュニケーション・ギャップをなるべく軽減し、ネイティブ・スピーカーと円滑にコミュニケーションをはかる上で、文化の相違がコミュニケーションに与える影響についても理解出来るように指導する。例えば実際のコミュニケーションの訓練の場において、異文化学習の素材の豊富な映画教材などを利用して、異文化学習とコミュニケーション能力の習得を同時に行うなら、より効果的な英語教育が可能になる。